

**【研究主題】** 児童の共感的人間関係を基にした支持的風土の醸成を目指して

**【副題】** ~特別活動の実践を通じた発達支持的生徒指導の推進~

**【学校・団体名】** 滋賀県湖南市立三雲東小学校

**【役職名・氏名】** 校長 川嶋 稔彦

## 1. はじめに

本校は開校42年目を迎える全校生徒252名の小規模校である。開校以来、学校教育目標「人間尊重の精神をふまえ、たくましさと優しさが調和した心豊かな子どもの育成へいのちかがやく 東小～」に向けて人権教育を核とした学校経営に取り組んできた。

また、昨年度から「笑顔でウェルビーイング」をスローガンとして子ども・教職員・保護者・地域の笑顔の実現に向けて教育実践に取り組んでいる。とりわけ、共感的人間関係の構築から「自己有用感」を高め「自尊感情」の向上を目指して校内研究を一新し、「特別活動」を窓口に研究を推し進めている。

そこには様々な教育的課題から起因する子どもたちの無気力で無関心な人間関係を改善したいという教職員の熱い思いがあったからである。子どもたちの無気力・無関心から起因する希薄な人間関係が基となる学級・学年風土を温かな共感的人間関係を基軸とした支持的風土へと醸成させたいという教職員の共通の思いが同じベクトルで研究を進めていく大きな原動力となつた。

本稿では、令和6年度の「特別活動」を研究の核に据えて、「学級会」「学校行事」を中心に共感的人間関係を基にした支持的風土の醸成を目指した実践報告をする。

## 2. 主題設定の理由

### (1) 本校の教育的課題

#### ① 不信感を基にした人間関係

本校の子どもたちは、相互の人間関係において相手を思いやったり、相手の立場に立って他者理解をしたりする力が脆弱であると思われる。そのような人間関係だからこそ、簡単に暴言やいじめが発生する。それは、相手を見下すことで子ども自らが自信を持てないことやできることを隠蔽しようとする姿の顕現である。子どもたちは本音で思いをぶつけたり、語り合ったりすることができず、いつも虚構の言動で虚勢を張る姿が散見されるようになる。

以上のような言動が、お互いを信用しない不信感があふれる人間関係が構築されていった。

#### ② 自己有用感・自尊感情の低下

「自信が持てない」「できないことが知られたくない」「失敗は嫌だ」という感情が子どもたちの中で増幅され、虚飾の自分を見せようとするようになる。子どもたちの「自己有用感」を持つ機会が失われ、「どうせやつても無駄」「無理に決まってる」といった感情に支配される。友だちからの「認め」がない状態が続くと「自尊感情」が低下し「自分はどうせ何をしてもダメ」「学級で協力するとかどうでもいい」という感情に陥る。そうなると学級や学年のために何かしようとする協力的な言動が極端に少なくなり非協力的な集団へと変貌する。「無気力で非協力的な集団」と化した学級・学年集団は学校行事、授業全てにおいて前向きに取り組めなくなり、学級・学年がうまく機能しない状況が生まれた。

#### ③ 多様性を背景に持つ子どもたち

近年、本校では、外国籍・外国にルーツを持つ児童が急増している。国籍もブラジル、ペルー、中国、ネパール、ベトナム等さまざまである。母語もそれぞれ異なつており、日本語指導加配教員、母語支援員が配置されている。日本語習得レベルも来日年数や子ども一人ひとりの能力の差異により大きく異なる。日本語能力によって日本語教室に通級する時間数を決定し、主に国語科、算数科を教えている。他教科においても加配教員が入り込みで指導を行っている。

また、特別支援学級に在籍する児童も近年増えており、交流教科では通常学級の子どもたちと共に学ぶ機会となっている。特別支援学級の子どもたちの特性も子どもたち一人ひとり異なり、個別に支援・指導していく必要がある。

上記のような多様性を持つ子どもたちは、特に自信を持てない子どもが多く、自己有用感、自尊感情が低い。授業や学校行事では、自信が持てないことから無気力・無関心に陥りやすく、消極的な参画になりがちであ

る。

## (2) 研究の方向転換

### ① 日本式教育「TOKKATSU」

前述した教育的課題を克服し、共感的な人間関係を基にした支持的風土の醸成を目指すために「自己有用感」の獲得、「自尊感情」の向上をキータームとして研究を転換することとした。そのために教職員全員で熟議を重ねて、多様な子どもたちも活躍できる「特別活動」を窓口にして研究を進めることで一致した。

「特別活動」は、今や世界が注目する日本式教育である。特にエジプトでは、日本式教育モデルとして学校への導入が進んでいる。その他の中東諸国、東南アジア諸国でも導入が検討され、「TOKKATSU」という呼称で広がりを見せている。そこには、子どもたちが自ら進んで参画し、自分たちで話し合って物事を決定する「学級会」。全員で協力して行事を創り上げていく「学校行事」。ほかに朝の会、帰りの会、清掃活動が、積極的に導入されている。そこには、学力だけでなく「非認知能力」の育成が重要視されている潮流があり、「TOKKATSU」は、これらの能力を育むうえで効果的な教育活動として評価されている。

### ② 発達支持的生徒指導の積極的取組

12年ぶりに改訂し、令和4年12月に公表された「生徒指導提要」では、4つのポイントとして以下の点を挙げている。

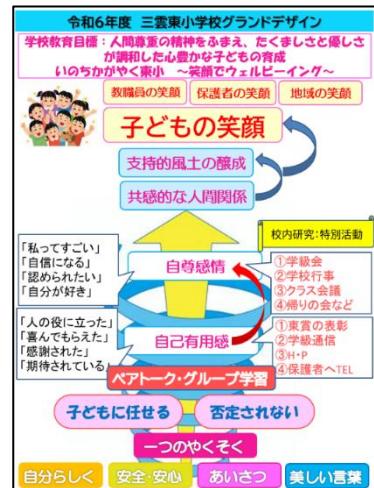
1. 自己存在感の感受
2. 共感的な人間関係の育成
3. 自己決定の場の提供
4. 安全・安心な風土の情勢

この4つのポイントを推進していくうえで「特別活動」の果たす役割が大きい。特に「発達支持的生徒指導」では、すべての児童の発達を支える観点から、特別活動の取組は「積極的な生徒指導」として「自己有用感」「自尊感情」を育み、高めていくものである。そのためには、「特別活動」での「対話」を通して「認め」や「励まし」をお互いに働きかけていくことが非常に有効であると考え、これまでの教科指導の校内研究から「特別活動」を核とした校内研究へと大きく方向転換していくこととなった。

### 3. グランドデザインの策定

まず取り組んだことは、「グランドデザイン」の策定

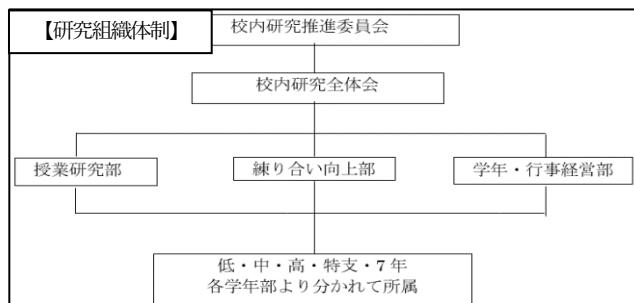
であった。学校が新しく目指す学校教育活動全体をわかりやすく明確にしていく目的で、校長を中心として教頭、校内研究主任、学年主任と熟議を重ねて策定した。完成したグランドデザインは、保護者、地域の方々へH・Pや校報を通じて発信し、理解の促進を図った。



### 4. 校内研究組織の再編と新たな取組

次に着手したのが、校内研究組織の再編である。前年度まで取組を進めてきた国語科を窓口とした読み解く力の育成から大きく研究が転換したためである。

まず、校内研究主任に前任校で特別活動に取り組んだ経験のある教諭を配置した。研究主任を中心として3つの部会を組織し、それぞれの部会長には特別活動の経験値の高い教諭を配置し、より一層研究の推進力となる組織作りを行った。この組織が研究主任を核として学級会の初步的な方法、学級会グッズなどを整備し、誰もが学級会に気軽に取り組める環境を確立することができた。



#### (1) 授業研究部

子どもにとって必然性のある課題に対して、学級全体で支持的な話し合いに関する研究を以下の内容で行う。

〈具体的な研究内容〉

i 学級会(1)の実践

ii 実践検証、共有化…研究授業、一人一授業の実施

まず、学級会(1)の活動について、学級会の手順や方法、流れを知らない教員が多く、議題選定から事後の活動までを研修を通して共通理解するようにした。校内研究推進委員会のメンバーを中心として「模擬学級会」を開催した。準備委員会の様子も動画を作成し、何のた

めに準備委員会をするのかも明確にした。

学級会の実践として各学級年間8回以上の学級会開催を目標とした。これは、8回以上実践すると学級全員が司会グループを担当することができるからである。研究授業として低・中・高学年部で1本、全学級で一人一授業公開することを原則とした。

学級会を全ての学級で実践していくことで、子どもたちの中で、自分たちで決定していく達成感を感じられるようになっていった。また、明確に反対するのではなく、「○○さんの意見に心配です」と相違な部分を指摘して話し合いを重ねていくようにした。「反対です」と言われると否定されたと思い、次に意見が言いにくい状況になってしまふと考えたからである。つまりアサーションを意識した話し合い活動へと昇華させていったのである。アサーションを用いることで意見を言うことに対する不安が除かれ、安心して発言できる雰囲気を醸成することができた。この意識は後述する「練り合い向上部」のクラス会議の取組によるところが非常に大きい。また、多様な背景をもつ子どもたちも活躍する場となり、これまで発言できなかつた外国籍、特別支援学級の子どもたちが生き生きと発言する場面が見られるようになった。

## (2) 練り合い向上部

話し合いの活性化に向け、支持的風土のある学級基盤づくりや話し方に関する研究を以下の内容で行う。

### 〈具体的な研究内容〉

i クラス会議の実施

ii なぜならシートの取組

練り合い向上部では、意見や思いを伝えることを最重要ととらえて研究を行った。

第一に「クラス会議」の実践である。クラス会議とは、学級全員が輪になってすわり、トーキングスティックを回しながらテーマについて発言するという活動である。ここで、とりわけ重要視したことは「否定されない」ということである。自分の発言が否定されると、自信が持てなくなり発言することをためらうようになる。どんな発言もすべて認められるという雰囲気づくりのために、ルールとして「否定しない」ことを条件として実践した。

第二に、「なぜならシート」の実践である。「なぜならシート」の目的は、自分の意見や考えを明確にすること、自分の意見や考えを掘り下げること、理由付けすることである。「なぜならシート」を週1回のペースで全学級が取り組んでいくことで、自分の意見を自分で掘り下げてくわしく説明することできるようになった。子どもたちは「なぜならシート」に夢中になって、テーマも自分たちで考えられるようになった。

### (3) 学年・行事経営部

系統的な児童の主体的活動に関する研究を学校行事、児童会活動を通して以下の内容で行う。

### 〈具体的な研究内容〉

i 学年、学校行事における児童の主体的活動への提案  
ii 各学年における主体的活動の系統性

学年・行事経営部では、学校行事をいかに子どもの主役にして、子どもたちが主体的に行事の運営を行うことができるのかを研究していった。

まず、子どもたちが失敗してもそれを学びとしてとらえて教師、子ども同士で「認め」を積極的に入れていくことを推進した。実行委員制を取り入れ、子どもたちが企画、提案、実行していくことを教師はあくまでもサポート役に徹する。子どもたちのアイデアを積極的に取り入れて、子どもに任せせる部分や場を徐々に多くしていく。教師のこれまでの教師主導の行事運営に見られた固定概念からの脱却が必要であり、教師も失敗を恐れずに取り組む姿勢に変容していった。

右の写真は「全校集会」の打合せの様子である。全校集会は、これまで教師主導で運営し、子どもたちは教師の指示のもと参画していた。令和6年度からは、子どもたちが自分たちで打合せ、司会進行を行うようにした。打合せ



なぜならシート

テーマ レストランで注文するなら、「カレーライス」「カレーうどん」どっちを頼む?

わたしは、\_\_\_\_\_です。

なぜなら、  
\_\_\_\_\_

\_\_\_\_\_

\_\_\_\_\_

\_\_\_\_\_

\_\_\_\_\_

\_\_\_\_\_

\_\_\_\_\_

\_\_\_\_\_

\_\_\_\_\_

\_\_\_\_\_

\_\_\_\_\_

\_\_\_\_\_

\_\_\_\_\_

\_\_\_\_\_

\_\_\_\_\_

\_\_\_\_\_

\*こんな言葉を使ってみよう。考えてみよう  
・「理由の一つ目は…」  
・「ほかにも…」  
・「など…」  
・自分の選んだものにしかないよさを挙げる。  
底辺に「なぜなら」と覚える理由を見つけられるといいね!



では「校長先生の今月の全校集会の話は何か」と事前に話の内容を確認し、コメントを考えておくのである。そうすることで、スムーズな進行が可能となるのである。

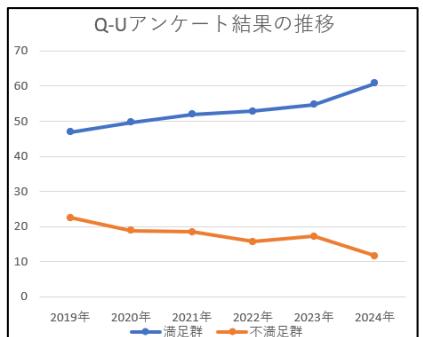
音楽会では、学年練習においてパートごとに子どもたちに任せて自分たちで教え合いながら練習する場を作った。そうすると自然と自分たちで認め合い、できしたことをお互いに賞賛しあうようになった。そこには「自己有用感」が生まれ、音楽会を成功させたいという学年のまとまりが生まれていったのである。その他の行事においても子どもたちに任せるようにして、子どもの主体性を育んでいった。



## 5. 子どもの変容

### ① Q-U 結果

本校では、2019年度からQ-Uアンケートを実施している。本稿の実践を行った2024年度の結果では、「満足群」の割合が非常に増え、「不満足群」の割合が大きく減少している。自分たちの学級の居心地が良く、安心できる支持的な学級風土に変容したことが分かる。

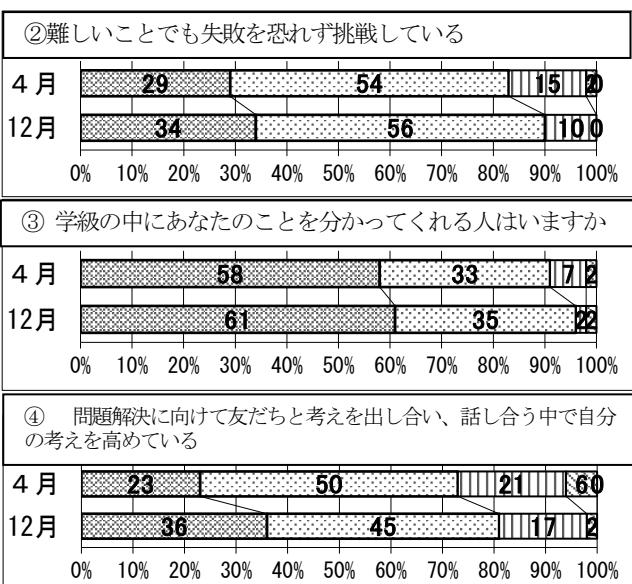
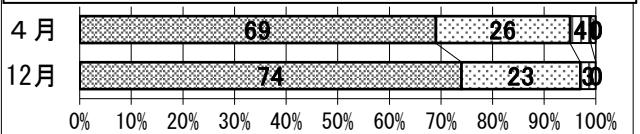


### ② 児童アンケート結果

児童アンケートを4月と12月に様々な観点から実施している。その中で今回の研究に関する「自己有用感」「自尊感情」「共感的人間関係」「支持的風土」の観点についてのアンケート項目を中心に分析を行った。

- ①あてはまる
- ②どちらかといえばあてはまる
- ③どちらかといえばあてはまらない
- ④あてはまらない

#### ① 物事を最後までやり遂げてうれしかったことがある



設問①では、強い肯定が69%から74%へ上がっている。これまでよりやり遂げてうれしい経験が、学校行事、学級会での主体的な取組により高まったと考えられる。学級会で決めたことをやり遂げた経験や学校行事に自分たちで主体的に取り組み得られた達成感がこの結果につながっている。

設問②では、強い肯定が24%から34%、設問③では58%から61%に上がっている。これまで「もう無理や」「意味ない」とすぐに諦めていた子どもたちが、失敗を恐れなくなっているのは大きな変容である。そこには、友だちからの「認め」が大きく関わる「わかってくれる人がいる」との回答が増えていると考える。また、失敗しても「大丈夫」「ドンマイ」と励ましの声かけが増えていることの表れであると考える。

設問④では、強い肯定が23%から36%へ13ポイントも上昇している。これは、学級会やクラス会議の取組の成果の表れであることは、間違いない。学級会で身に付けた話し合いから問題解決する力は、教科学習にも汎用されている。教科学習での対話的学習にも積極的に取り組む子どもの姿が増えてきている。

## 6. 今後に向けて

令和7年度も引き続い「特別活動」を核に研究を推進している。今年度は、昨年度の課題であった「合意形成」を子どもの「共感」と「納得」ができるように思考ツールと司会グループ以外のファシリテーションにフォーカスして研究を推進している。全ての子どもが「共感」と「納得」を得られる話し合いを深化し、発達支持的生徒指導をさらに拡充していきたい。